

仲村雅彦著

日本の暴力団

全国二百数十団体約十三万名の徹底研究
〈各団体幹部・役員の名簿つき〉

政界往来社



仲村雅彦著

日本の暴力団

全国二百数十団体約十三万名の徹底研究
〈各団体幹部・役員の名簿つき〉

政界往来社

なか 村 雅 彦
仲 村 雅 彦

昭和11年3月1日生まれ。早大中退後、右翼・荒原朴水次女と結婚。昭和52年に日刊ゲンダイを退職。左肺摘出ののち万年東一の紹介で極東三浦連合会（現・真誠会）の機関誌「限りなき前進」の編集を通し松山真一総長、大山・山口最高顧問、池田会長らと知り合う。昭和59年、徳間書店の「問題小説」新人賞を受賞し、「週刊実話」、「問題実話」、「実話タイムス」にヤクザ記事を掲載。各親分と知り合い、知己となる。極東真誠会の金子三吉会長補佐とは中学の同級生であり、現在は「実話ゲンダイニュース」編集長も兼ねている。

住所 東京都板橋区坂下3-16-1-201
電話 03(968)7027

日本の暴力団

1985年4月25日 第1刷発行

1985年6月6日 第6刷発行

著 者 仲 村 雅 彦
©1985年

編 集 兼 恩 田 貢
発 行 人

印 刷 所 誠隆印刷株式会社

発行所 株式会社 政界往来社

水 野 健

東京都新宿区新宿6-27-48

電 話 03-207-8701(代)

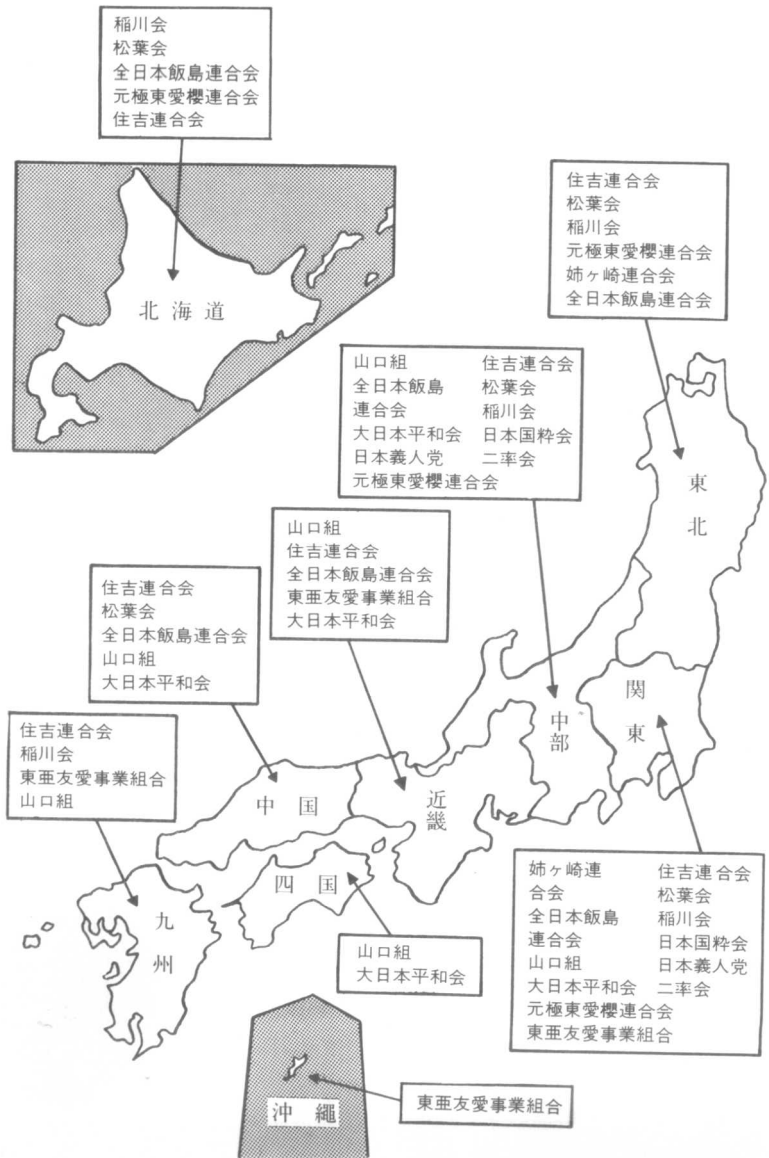
振 替 東京4-20968

郵便番号 160

ISBN4-915303-03-9

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。 Printed in Japan

広域暴力団全国分布図



絶賛発売中!

ミネの旦那がついにブチまけた芸能界五十年秘話!

八方破れ言いたい放題

著名人69人を狙上りにのせて悪口雑言メツタ斬り

四六判 上製 三一六頁 定価一五〇〇円

日本歌手協会会長

デイック・ミネ著

「ダイナ」「人生の並木道」「夜霧のブルース」など、歌った数は千曲以上、斬った女も千人を超える。デビューして五十年、その放蕩無頼な体験談を踏まえた著者ならではの粹談、芸談、そして艶談と、芸能界の裏側をスツパ抜く。堂々のベストセラ入り!

「アフタヌーンショー」「こんにちば2時」「ルックルックこんにちば」「やすきよの笑って日曜日」など、テレビ、ラジオ、週刊誌などで続々と紹介され、芸能界に一大パニックをまき起こしている話題作。

まえがき

『日本の暴力団』というテーマで取材・執筆を依頼された時、かなりの迷いがあった。期間が短いこと、出版する以上は完璧なものをと欲が湧いた。

だが、暴力団組織の内部での出入りが激しく、破門、昇格ということが随時行なわれているのが実情である。把握は至難である。

そこで岳父である荒原朴水（全日本愛国者団体会議創立者）に相談をしに行ったところ、「満点の物はできまい」

という返事を受けた。

その足で世話になっている極東真誠会の松山真一総長に指示を仰いだ。

「むずかしいよ」

といわれたのだが、今の時点でまとめあげるのも無駄ではないという気持ちが出て、執筆に入ったのだ。

暴力団という呼称は、個人的には好きではない。マスコミと暴力団とは相反するものであり、

暴力団が今日のように話題性を持ったのは、この四、五年でもあり、資料というものがほとんどない。

こうした中での取材・執筆というものは、至難の業であり、一部しか触れることのできないもどかしさがつきまとった。

幸い、真誠会の大山光一最高顧問、池田亨一会長らとの面識があるので、資料などを拝借したり、知恵を借りたり、という状況で進めはじめたのが実情である。

書いているうちに、何人かの親分衆と知り合い、考えや性格を知った。

暴力団の親分といえば、一般に粗暴で野蠻という印象というより観念があるものだが、それはまるで違っている。

人生観もすっかりしている。何よりも魅力がある人々なのだ。

親分といわれ、頭に立つものは、どこかに人を惹きつける魅力がある。だが、組織となると厳しいもので親分たちの性格を一変させるのだ。

こうした中での執筆は、資料不足と取材不足のまま、意図とは違ったものが表出していく不安も平行し、何度か断わりかけた。けれども、版元の事情もあり、いまさら投げ出すわけにはいかなかった。

今回の刊行は、そういう意味では不満でもあり、陽の目をあてたくない気持ちだが、思い切って執筆に踏み切った次第である。

あえて執筆に踏み切ったのは、日本中にこれだけの組織があるということを知って欲しいという意図でしかない。

その意図も、資料不足と取材不足のために完璧でないことを深くお詫びせねばならない。機会があれば、補足の意味で続篇を刊行して頂ければ幸甚である。

刊行に当たって、関係筋のご協力と助言に感謝するとともに、関係各位のご不満はご寛容のほど伏してお願ひ申しあげます。

昭和六十年三月

仲村雅彦

日本の暴力団

目次

まえがき

1

現在の暴力団の現状と今後の展望 9

新局面を迎えた山口組の複雑な内情 25

新興精鋭集団・一和会の実力度 63

日本のドン任侠に生きる稲川会の詳細 97

関東の雄・住吉連合会の任侠道とその全貌

129

任侠組織・松葉会の内情と深層 153

巨大組織へ胎動する極東系列の今後 175

日本を縦断する寄居連合会の組織力 199

全丁字家の中核・誠心会の戦闘力 219

東北の神農集団・西海家総連合会の実態 237

その他暴力団の現状と変容などを徹底研究 259

各団体幹部・役員の名簿一覧 289

現在の暴力団の現状と今後の展望

受難時代に統合が逆に進む

任俠系やテキヤ系が、暴力団と呼ばれはじめたのは昭和三十年代である。その背景には経済、道徳、あるいは政治的な要素がからみあっていた。

当時、政治的には共産党の躍進があり、食糧難という世相と併合して、相次ぐデモが生じ、人心が不安であった。

この共産党の躍進に時の法務大臣・木村篤太郎が任俠系・テキヤ系を網羅して、『反共抜刀隊』約十四万人を組織した。

『反共抜刀隊』は陽の目を見なかったが、参画した任俠系・テキヤ系は新たな組織をつくりあげた。

任俠系では関根組、テキヤ系列では極東愛櫻連合会その他の大組織ができあがり、力と力の抗争が生じた。

連合軍総司令部（GHQ）と日本政府が、組織の解体を狙ってうごめいた時に、故・児玉誉士夫が関東連合会の結成を計画した。

稲川聖城会長はじめ住吉一家、日本国粋会、松葉会（関根組）、東声会、義人党などが参画したのだが、政府側の圧力で解散を命じられたのが、団体等規制法案であった。

この時から暴力団という呼称が生じると同時に、広域暴力団の指定を受けた組織も生じてい

る。

昭和三十八年には、暴力団が全国で五千二百十六団体にもぼり、構成員は、約二十万人という数字を記録しているほど分散して、組織化した。

暴力団は勢力拡大を図るために、まさに戦国時代へと突入して、各地で勢力拡大のため攻防戦が頻発した。

新聞紙上で暴力団という活字が使われ、一般市民の中に、暴力団、という言葉が浸透していったのである。

昭和三十年代の末に、警視庁側が頂上作戦と銘打って、暴力団一掃に力をそそいだのが、第一期頂上作戦である。

この頂上作戦は、広域暴力団指定七団体に絞り込まれた。七団体は山口組、稲川会、住吉会、極東愛櫻連合会、松葉会、日本国粋会、大日本平和会であり、その他の暴力団は、この七つの団体を中心に動いているというようにみられていた。

頂上作戦では、暴力団の資金への封鎖が主体であり、芸能界と興行面が狙い打ちされた。暴力団の息のかかった興行には、自治体の施設や会場を貸さなくなり、興行や芸能関係からの資金ルートを絶った。

こうした中で、第二次頂上作戦が相次いで警察側から発令された。

この頂上作戦の連続で錦政会が解散、稲川聖城も賭博事件で逮捕され、関東会も実質的に解

散した。

関東会は解散したものの、現在では関東二十日会として、名実ともに充実した組織となって活動している。

昭和四十年代から五十年代にかけては、暴力団も揺動期から定着期へ入り、縄張り、庭場というものがある程度定着して、安定期に入り込んだ時である。

左翼的行動の阻止を狙った破防法案が可決されて、凶器準備罪、あるいは集合罪などが暴力団にも適用されはじめたのだ。

賭博は非現行でも検挙されるようになり、まさに暴力団の受難時代がはじまったといっても過言ではない。

だが、この受難時代が逆に暴力団の統合を外的には進める状況となり、内部的には多角的な資金稼ぎの方向へと進みはじめていった。

外的には弱小組織を大きな組織が力と抗争で吸収する形となってきました膨れあがり、巨体化したのもこの時代であり、内部的には債権取り立て業、不動産に加えて従来のシャブ、ノミ屋（競馬・競輪）と一層、分散化して資金稼ぎに奔走した時代である。

山口組の優攻を阻止した稲川会

関西では山口組三代目の故・田岡一雄が破竹の勢いで全国征覇に野望の火を燃やすかたわら